

〔書評〕

松本英治『近世後期の対外政策と軍事・情報』（吉川弘文館）

濱口裕介

本書は、一貫して近世長崎における対外関係を研究してきた松本英治氏による研究書である。二〇〇〇年から二〇一四年までの既発表論文に加え、新稿も収められており、多年にわたる研究の到達点が示されている。

さつそく内容を紹介しよう。

まず、序章において著者は、ペリー来航を迎えた幕府が、意外にも適切な対処をし、迅速な「近代化」を達成しえたという事実から書き起こす。そして、「このような幕府役人の応接や幕府の対応を生み出した背景には、何があるのだろうか」という問題を提起する。そのカギとなるのは、蘭学の発展であり、また一八世紀末以来、幕府が対外的危機への対応を経験していたことであった。

そうした点を踏まえ、本書はペリー来航の半世紀ほど前、ロシア使節レザノフの来航、北方地域におけるロシアとの軍事衝突とゴローウニン事件、ラッフルズの出島接収計画といった対外的危機に揺れる寛政期から文化期（一七八九―一八一八年）に着目する。この時期に続発した対外的危機に対する幕府の軍事的・外

交的対応を、蘭学の発展や長崎の地域社会への影響を視野に入れつつ考察していく。具体的には、次の四点の課題を設定している。

- ① 異国船来航が長崎警備に与えた影響を、長崎の地域社会のなかで考察する。
- ② 異国船来航への対応を切り口として、長崎における情報操作の実態を明らかにし、近世の外交の特質に迫る。
- ③ 対外紛争に直面した幕府の軍事的・外交的対応を検討し、その歴史的意義を問う。
- ④ 長崎における情報操作の弊害を認識した幕府が、どのような外交姿勢を打ち出していったかについて検討する。

序章で示されたこれらの課題を念頭に置きつつ、以下第一部から第三部までの諸論考において、興味深い新事実の数々が明らかにされていく。

〔第一部 対外的危機と長崎の地域社会〕

第一部では、レザノフ来航に至るまでの長崎警備体制を組上に載せ、長崎奉行と佐賀・福岡両藩の対外的危機への対応を長崎の地域社会のなかで検討している。

第一章「長崎警備とロシア船来航問題」では、ラクスマン来航を機に想定されたロシア船の長崎来航問題を取り上げ、長崎奉行および佐賀・福岡両藩の対応を検討する。従来長崎警備といえば、フェートン号事件における佐賀藩の「失態」の印象が強く、それ以前の警備の実態については不明な点が多かった。そのため、

本章ではこの事件以前の寛政期における警備のあり方を明らかにすることを目的にしている。その結果、ロシア船来航が予測された寛政期の時点において、すでに警備手順の確立や石火矢の新造など長崎警備の補強が進み、改革が推進されつつあったことが明らかになった。

第二章「蘭学者青木興勝の長崎遊学と対外認識」は、福岡藩における蘭学者の嚆矢、青木興勝の長崎遊学について検討している。遊学の目的や実態を明らかにした上で、『阿蘭陀問答』の検討により、興勝の対外認識を読み取ることに成功している。それらの成果に立つて、長崎警備を担う福岡藩ならではの、蘭学の地域的特質までを論じている。

第三章「レザノフ来航予告情報と長崎奉行」は、レザノフ来航が事前にオランダ商館から長崎奉行に予告されていたという従来看過されがちだった事実に着目し、その国際的背景、情報に対する長崎奉行と佐賀藩の対応を検討している。あわせて、オランダ商館長による情報提供や長崎奉行の情報管理から、長崎における情報の意義までを読み取っている。

〔第二部 対外的危機と幕府の軍事的・外交的対応〕

第二部においては、文化魯寇事件とフェートン号事件という対外紛争に直面した幕府の対応を、軍事と外交の両面から追及している。

第一章「フヴォストフ文書をめぐる日蘭交渉」は、文化魯寇事件を引き起こしたロシア側の意図を知る手掛かりとして注目されたフヴォストフ文書をめぐる動向についての考察。文書はロシア語・フランス語で書かれていたため、幕府はオランダ商館長ドゥーフにその翻訳を依頼し、さらに意見や情報を寄せるよう求めたという事実を新史料から明らかにした。さらに、オランダの利用価値を認めていく幕府の外交姿勢を指摘

した。なお、考察のなかで従来存在が知られていなかった仏文のフヴォストフ文書（松前奉行宛書簡）を紹介したことも本章の大きな成果である。

第二章「阿蘭陀通詞の出府と訳業」は、文化魯寇事件を機に幕府が長崎の阿蘭陀通詞に江戸への出府を命じ、ロシア船の応接に備えさせたことを論じている。出府を命じられた四名の通詞、名村多吉郎・馬場為八郎・石橋助左衛門・本木庄左衛門の出府の経緯と訳述の成果をたどることで、幕府の対外的な対応を見直すという丹念な仕事である。その結果、本来長崎で対外交渉にあたる阿蘭陀通詞の存在が、江戸の幕府天文方において地図・軍事関係の新知識に寄与する人材として注目されてゆく過程をあざやかに描き出した。

第三章「幕府の洋式軍艦導入計画」は、フェートン号事件を機に着手された長崎警備改革のなかで、幕府がオランダ人士官を招き、西洋式の軍艦を建造・操練する計画があったという興味深い新事実を指摘する。新史料を用いて計画が頓挫するまでの経緯を明らかにし、さらに大船建造の禁令に対する幕府内の理解が変化する契機まで指摘している。

第四章「幕府の戦時国際慣習への関心」は、文化魯寇事件によりロシアとの紛争状態となったことが、幕府に戦時国際慣習への関心と理解をうながしたことについて考察している。幕府の諮問に対するオランダ商館長ドゥーフの回答や阿蘭陀通詞の訳述から、戦闘の開始と終了の合図、捕虜の取り扱いといった西洋の慣習を幕府が理解していたことを明らかにした。あわせて「国際法との出会い」という観点からその意義を考察している。

〔第三部 幕府の対外政策と長崎の地域社会〕

第三部は、長崎の地域社会で見られた情報操作の実態を明らかにした上で、それを抑制する方向性を強め

ていった幕府の外交姿勢を、蘭学との関係を踏まえて検討している。

第一章「大槻玄沢と幕府の対外政策」は、蘭学者大槻玄沢の著作『嘆詠餘話』『捕影問答』『寒燈推語』を組上に乗せ、幕府の外交政策との関連を検討する。長崎において常態化していた阿蘭陀通詞による海外情報の操作を、玄沢は著作ですどく指摘する。これを受けた幕府は、蘭学を公学として採用し、江戸に外交業務を集中させる方針に転換していく。その先には、幕末期の翻訳機関、蕃書調所の成立が見通せると著者は指摘する。

第二章「ラッフルズの出島接收計画と長崎奉行」は、本書のために書かれた新稿。ナポレオン戦争を背景としたイギリスの東インド総督ラッフルズによる出島接收計画の顛末について、新史料をもとに明らかにしている。通説では、この事件はオランダ商館長ドゥーフが見事に立ち回り、フランスによるオランダ併合といういわば「不都合な真実」を幕府に隠しつつ、イギリス側の計画を頓挫させたと理解されてきた。ところが、著者は史料に現れる「紅毛内探」という言葉をヒントに、幕府がドゥーフのことを鵜呑みにせず、独自の調査を実施していたという新事実を喝破する。そして、幕府はドゥーフの虚偽を見破りながらも、あえてそれを見逃していたという驚くべき事実が明らかとなる。

第三章「ゴローニン事件と天文方」は、ゴローニン事件を機に外交業務を主導するようになった幕府天文方が、長崎から発信された情報とそれ以外の情報を比較・分析し、対外情勢の把握に努めていたことを検討している。あわせてオランダ商館長の虚偽報告が問題化しなかった事情、幕府にとってのオランダの利用価値といった問題にも言及している。

最後に、終章「対外政策と軍事・情報」において、序章で設定した四点の課題に即して、本書の考察をまとめていく。

以上、はなはだ簡単ながら、本書各章の内容を紹介してみた。本書については、すでに松尾晋一氏による書評がある（『日本歴史』第八三〇号 二〇一七年）。また、インターネット上にも本書の読者からさまざまな感想がつづられているのを目にするが（評者が見た限り、みな一様に高評価である）、本書のような専門書でここまで反響があるのも珍しい。だが、一読してみれば、むべなるかな。いずれの論考も新事実・新説が明らかになる過程はまことにスリリングで、読みごたえがあるのだ。要するに、たいへん面白いのである。

ところで、本書のキーワードを挙げるとしたら、終章で示された「現地外交」（または「通詞外交」ということばになるだろうか。長崎・対馬・薩摩・松前のいわゆる「四つの口」において展開された、地域独自の論理にもとづく分権的な近世の対外関係。それを表すことばとして、「現地外交」は言い得て妙である。

さらに本書は、近世独自の「現地外交」が、さまざまな新しい事態にフレキシブルに対応できる柔軟性を有していたことを示す一方、文化期にはその弊害も指摘され、その打破をめざす新たな動向が生じたことについて指摘している。そして、そうした新体制の模索の彼方に、冒頭で言及した「開国」期における幕府の「近代化」政策が見通せると著者は指摘するのである。

近世・近代移行期は、近世史研究者と近代史研究者によって別個の評価が与えられがちとは、よくいわれるところ。本書のようなすぐれた研究こそ、近世史研究者だけでなく、近代史研究者も財産としてほしいところだ。本書が広く読まれることを、評者も心から希望する次第である。